

1 地域コミュニティの再生とまちの魅力向上について

＜背景・課題等＞

- ・ 神奈川県では、三浦半島地域圏、県西地域圏で、既に人口減少を迎えており、また、県全体でも、令和2年の約920万人をピークに人口減に転じる見込みとなっている。
- ・ 人口減や空き家の増加による地域活力の低下が懸念されており、これらの課題解決のため、空き家等の既存ストックを活用することなどで活力向上を図る必要がある。
- ・ こうした中、県内の各地域（市町村）では、地域コミュニティの再生に向け、移住・定住促進等をキッカケとして、それぞれの地域で独自の取組みが始まっている。
- ・ 取組みのなかには、地域独自の魅力を発見し、光を当て、発信する人々や団体が、まちの魅力向上に貢献している事例がある。
- ・ 地域コミュニティの再生やまちの魅力向上に向けて、行政ができることを検討する必要がある。

＜論点＞

- ・ 地域の魅力を発見・発信する人、団体、組織の発掘・育成・支援など、行政がその活動をどのようにバックアップしたらよいか。
- ・ 行政が地域に入り込み、地域住民と課題を共有し、解決に向けて一緒に行動していくことも大切ではないか。
- ・ 地域コミュニティ再生等の取組みを広めるため、県内市町村間で情報交流等を行うことにより、施策連携していくことが重要ではないか。

多様な居場所・新しい居場所と地域とのつながり

＜どのようなタイミングで居場所が求められるか＞

- ・ 地域には、それぞれ、魅力がある。（風景、自然、歴史、人、コミュニティ）
※人々は、空き家・空き地のある「疎」なところに新しい価値を生み出す期待と魅力を感じてきている。
- ・ 地域の魅力に気付き、発信しようとするプレーヤーがいる。
- ・ プレーヤーが発信する居場所 → 空き家活用（本屋・出版、IT関連）
- ・ プレーヤーが集まる居場所 → 建物（地元の酒屋、パン屋、宿、テックラボ）
空間（マルシェ、共同農園）
- ・ プレーヤーとプレーヤーがネットワークで繋がり、地域の魅力が広がる。

＜どのような場所に居場所が求められるか＞

コロナ以降の生活様式の変化

- ・ 働く場所（職場）が住まいに近くなる、近くできる。
- ・ 新しい居場所が求められる。 → 自宅の一部、コワーキングスペース
- ・ 職場が地域内（生活圏内）になる。
- ・ 地域に新たな居場所ができる。地域に居る・過ごす時間が増える。
- ・ 自分が身を置く地域での居場所が、生活するうえで重要となる。



今こそ、地域が大切になる

地域と行政のかかわり

＜「地域の取組み」に行政がどうかかわるか＞

- ・ 各地域（市町村）では、個々に特徴のある取組みがある。
- ・ それぞれの取組みをヒントに市町村職員が自らの自治体にフィットする、アレンジできる取組みをイメージすることで、各自治体の新たな住宅施策に展開する。

【県ができること】

- ・ 県市町村職員間のワーキング等で繋がっていく、スキルアップを図っていく。
※施策の横展開だけではなく、職員自らが地域の魅力に気付き、自発的に取り組むことも重要。

＜地域の取組み手法と継続性＞

魅力ある地域コミュニティはどうできるのか。どうすれば継続できるのか。

- ・ 住民が主体的にまちづくりに動く ← 行政のバックアップ
※行政が押し付けない。住民に寄り添う。住民の自主性を促す。キッカケを作る。
- ・ まちに足りないものを住民が足していく → パン屋、美容室、お茶場
※ 行政は、住民と一緒に地域の課題を拾う、解決しようとする。場を作る。
まちをよくしていている人々、団体等の組織を支援する。
- ・ 住民が地域で働き、地域での役割を担う(提供していく)中で、地元愛が育まれる。
- ・ まちのよいところを地域住民みんなで共通認識を持てるようにネットワークする。

- 【施策の方向性】
- ・ 地域コミュニティ再生や、まちの魅力向上に取り組む地域住民や団体等を支援する仕組みづくり（ネットワークの構築など）
 - ・ 行政職員間のワーキング等によるスキルアップ、情報交流（地域コミュニティ再生の取組みを情報共有して、各自治体の魅力あるまちづくりに生かす）